

令和7年度 大田区立入新井第二小学校 自己評価 報告書

令和8年2月25日

○ 本校の概要

★人権教育研究協力校〔人権教育の基本方針〕人間尊重の精神を基に、心身の調和のとれた発達と伸長を図り、自主性と創造性に富む人間性豊かな児童の育成を目指す。
 ★コミュニティー・スクール 1 学校、家庭、地域の連携・協働により、子どもたちを見守り育ていく教育環境をつくり「地域とともにある学校」をつくる。 2 地域資源を生かして豊かな教育を進め、次代を担う子どもたちの「生きる力」を育む。
 【学校規模】児童数690名、学級数24学級、教員数44名
 【教育目標】「考える子」・基礎・基本を身に付け、意欲的に学ぶ子 ・よく考え、自ら判断し、行動できる子 ・課題解決に向かって、最後まで取り組む子
 「健康な子」・自ら進んで体を鍛え、外遊びを楽しむ子 ・友達と仲良く、生き生きと活動する子 ・望ましい生活習慣を身に付け、よく働く子
 「やさしい子」・相手を思いやり、差別を許さない子 ・人とのかかわりを大切に、明るく挨拶する子 ・自然に親しみ、心豊かに感動できる子
 【目指す学校像】学力・心・身体がバランスよく成長している健康な子どもが育つ学校 (1)子どもたちが基礎基本の学力を確実に身に付けることができる学校
 (2)子どもたちが温かい人間関係を築き、心身共に安心して生活することができる学校
 (3)子どもたちが基本的な生活習慣を身に付け、健康で生き生きと活動ができる学校
 【研究主題】「読解力を身に付け、考えを深める子どもの育成～読み取る力を高める国語科の授業づくりを通して～」

○ 自己評価及び学校関係者評価の結果の概要と改善策

大項目	方向性	取組内容	取組指標	取組評価	目標に対する成果指標	成果評価	これまでの取組 今後の改善策	学校関係者記入欄		
								評価	人数	コメント
生予個性測別力難標をな1育未成来し社会を創造的に	社会の様々な課題を自分事として捉え、主体的に考え、他者と協働し、問題解決していく意欲や、予測困難な未来社会を切り拓いていくために重要な創造力や課題解決力、情報活用能力を育成します。	①STEAM教育等の教科等横断的な学びや科学教育を推進し、課題解決力や新たな価値を創造する力の育成を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	B	・主体的に課題に対して解決していくことができるように、体験的学習や問題解決能力や創造性、コミュニケーション能力、協調性、思考力、情報活用能力をICT機器を活用しながら育成している。	4:	【取組】 ・新教科「おおたの未来づくり」について年間指導計画をもとに、企業とコラボレーションし、実践を重ねることができた。教科横断的かつ系統的にものづくりや共生を意識した学習を推進することができた。 ・体験活動を通して主体的に活動し、自分事として捉えることができた。 「世界大会4連覇ダンスチーム講演会」 全校児童実施:ダンスのワークショップと講演会 「生きる力を育むプロジェクト」 全校児童実施:ミュージカルのワークショップ 「劇団風の子」 全校児童実施:学芸会に向けて鑑賞教室と劇指導 「移動水族館」 2年生:ドンキ・ホーテ 「フラワー公園」 4年生:地域の方とチーム入二による植栽指導 ・ICTを積極的に活用した授業づくりを行い、子どもたちの情報活用能力の育成を図ることが出来た。 【改善策】 ・おおたの未来づくりでは、企業(ドンキ・ホーテ)と連携を取りながら、計画的に行っていく。来年度はより具体的な取り組みが計画的にできるようにする。 ・タブレットの取り扱いについては、区から出される活用のきまりに基づいて、年度初めに保護者の協力のもと周知を確実に挙る。	A	10	・「おおたの未来づくり」では、民間の企業とコラボレーションし、実践を重ねる教育が、机上による学びでは得られない体験による授業になり、未来社会を創造的に生きる力を育成していると思う。全児童が取り残されることなく理解できるように実践してもらいたい。 ・「おおたの未来づくり」において、企業と連携として取り組むことは非常に素晴らしい取り組みであったと思う。 新教科「おおたの未来づくり」への取組を評価する。新しい取り組みで難しいこともあるかと思うが、今後もうまく進められることを期待している。
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。							
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。							
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。							
		②学校内外での様々な体験活動や自己評価する習慣づくりを推進し、自ら考え判断する力や、他者と協働していく力の育成を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	A	・様々な体験活動は、児童の主体的な取り組みとして何より重要と考える。きつと良い経験となり、成長を促してくれることと期待している。 ・「おおたの未来づくり」では、子どもたちの積極性が培われて良かったと思う。 体験活動にはいくつか参加したがどれも感動するものだった。	3:		A	0	・「おおたの未来づくり」の取り組みについて、教科横断的かつ、系統的学習を意識した進め方を評価、支持する。
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。							
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。							
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。							
		③情報技術を適切に活用した授業の実施を通して、情報活用能力の育成を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	A	・子どもたちへの体験格差問題が注目され始めた。昨年、学校内での体験活動を通じて、子どもたち自身が、自発的・主体的に興味をもって取り組める学習機会として、よりアップデートした授業となることを期待している。 ・多様な体験活動を行い、子どもたちが興味をもって取り組めるようになされていた。	2:		A	0	
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。							
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。							
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。							
				A	1:					

<p>お世 お界 た目 た目 を標 担な うが 人国 材際 を都 育成 都市 し し す</p>	<p>英語での実践的なコミュニケーション能力を高めるとともに、我が国や郷土の伝統文化に触れ、尊重する心や、協力していく態度を育成します。また、国際社会・地域社会に関心をもち、持続可能な社会を形成していく態度を形成します。</p>	<p>①外国語教育指導員の活用などにより、英語に慣れ親しみながら会話をする機会を増やし、英語力やコミュニケーション能力の向上、豊かな国際感覚の育成を図っている。</p> <p>②我が国や郷土の伝統や文化の学習、人権教育を推進し、自分とは異なる文化や価値観をもつ相手を理解し、互いに尊重し合う心の育成を図っている。</p> <p>③現代社会における地球規模の課題を自分事として捉え、その解決に向けて考え、行動する力の図っている。</p>	<p>4:「おおむねできた」と全教員が回答した。</p> <p>3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。</p> <p>2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。</p> <p>1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。</p>	<p>A</p>	<p>・大田区人権教育研究協力校として、英語やコミュニケーション能力の向上を図り、互いに尊重し合う心の教育と課題解決に向けて行動する力を育てる。</p>	<p>4:</p>	<p>【取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎週イングリッシュカフェを実施し、授業時間以外にもALTと遊びを通して外国語にかかわる機会をもうけた。9月にはイングリッシュウィークを行い、普段かかわっているALT以外のネイティブな方と一日の生活を通して英語で交流することができた。 ・大田区人権教育研究協力校として「いじめ撲滅宣言」「平和学習」「同和問題」「地域と考える人権展」などを実施した。人権展では福祉園にもご参加いただき、8施設になり、地域とともに交流し取り組むことができた。 ・人権の取組 <ul style="list-style-type: none"> いじめ撲滅宣言集会 道徳地区公開講座(いじめ・命・人権) 身体障がい者理解教育 認知症サポーター養成講座 高齢者施設交流 同和問題(食肉市場)講演会 人権の花 デフリンピック観戦 平和教育(戦争を聞く会) がん教育 <p>【改善策】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度同様、外国語の授業ではチーム入二(地域学校協働本部)を活用した教材作成や授業補助を行い、授業改善を図る。 ・相手を尊重する言葉遣いについては、学校だけの課題ではなく家庭、地域全体で継続的に呼び掛けるなど取り組んでいく。(学校便りなどのお便り、行事等で啓発) 	<p>A</p>	<p>8</p>	<p>・「国際都市 おおた」を担う人材育成として、外国語指導教員による語学教育は必要不可欠と思う。コミュニケーション能力の向上はもとより、外国籍児童も学ぶ入二小としても、人権教育にも適及しようと思える。</p> <p>・人権教育研究協力校として、いろいろの取り組みが多くみられ、大変良好だと思ふ。</p> <p>・英語教育(イングリッシュカフェなどの体験)、人権教育の取組を評価する。</p> <p>英語と人権教育に児童がかかわれることで、世界から身近な地域まで良い面、悪い面ともに知識を広げていくことを期待する。</p> <p>・授業時間以外、外国語と接する機会を増やした体験型英語教育、並びに、いじめ・平和学習・同和問題、地域との交流を通じて取り組んだ人権教育について評価、支持する。</p> <p>・相手を尊重する言葉遣いを身に付けることは、様々な人々との交流を円滑にし、余計な摩擦を起こさず、協調性を育む土台作りと言える。このような人材育成教育に、地域・家庭としてより連携と協働を深めたいと考える。</p> <p>・大田区人権教育研究協力校として、様々な講座や講演会を行い、人権を考える取り組みがなされていた。</p>
<p>た一個 め人 別の ひ目 基と 標 礎り 3 が な個 る性 力と を能 育力 成を し発 揮す る</p>	<p>児童・生徒が豊かな人生を生きていく上で基礎となる力として、豊かな心や確かな学力、健やかな体を育成します。また、乳幼児期から中学校までの一貫性のある教育を推進します。</p>	<p>①道徳科を中心とした各教科等での学習などを通じて継続的に道徳教育を実施し、豊かな情操や道徳心の育成を図っている。</p> <p>②学習習熟度に応じた指導や個に応じた学習支援、各種検定の実施を通して、すべてのこどもに確かな学力の育成を図っている。</p> <p>③体育や保健体育の授業など様々な機会を通して、健康教育や食育を推進し、基本的な生活習慣の確立を図っている。</p> <p>④乳幼児期から中学校まで円滑な接続を行うため、保幼小の連携や小中一貫の視点に立った教育を行っている。</p>	<p>4:「おおむねできた」と全教員が回答した。</p> <p>3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。</p> <p>2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。</p> <p>1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。</p>	<p>A</p>	<p>・豊かな心の教育を行う。楽しく学ぶことで基礎・基本の学力の育成を図る。健やかな体の育成と食育を行う。これらの学びを、保幼小連携や小中一貫教育で行っていく。</p>	<p>4:</p>	<p>【取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習効果測定の結果から成果と課題を分析し、授業改善推進プランを作成して生かした。昨年度よりも効果測定の結果が、4年社会・算数の正答率では70%達成、5年国語・社会・算数・理科の全てで70%を超えている。6年国語・社会・算数では65%、英語では80%の正答率を達成することができた。 ・補習教室(放課後)の内容を個々に合わせた準備をして、基礎基本が確実に定着するようにした。(土曜日実施を増やした。) ・小中一貫教育では、「基本的な生活習慣の確立」を統一指導として取り組んだ。個別指導の対応方法を明確にするため、結-ENというシステムを活用し、配慮が必要な児童への対応に活用した。(大森第三中学校との連携) ・学習支援が必要な児童については、定期的に校内委員会を開き、全教職員で対応した。次年度も継続する。 ・今年度から食育教育を栄養士と共に取り組み、授業実践をして食に対する意識を高めることができた。(年間計画の見直し) ・校庭での朝遊びが定着して常時30名が遊び、体力づくりに励むことができた。 <p>【改善策】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多様な学習スタイル(補習教室含め)に合わせるため、学習補助員などの人材を計画的に配置する。 ・健康教育や食育教育について、保健だよりや学校公開を活用して家庭へも啓発する。 ・様々な家庭環境に配慮し、来年度より7時30分～の児童の居場所づくりを実施する。 ・地域の方や来校者へも進んで挨拶ができるように、次年度も引き続き挨拶指導に取り組む。 	<p>A</p>	<p>10</p>	<p>・全児童に対して、一人ひとりが個性と能力を発揮する教育は、道徳科を通して情操や道徳心の育成から他人を能力だけで決めつけない教育を行っていると思える。また習熟度に応じたクラス対応も、教員数からみても難しく困難とも思えるのに、評価できる。幼保小の連携や小中一貫の視点に立った教育も、児童の個性と能力を把握する上でも必要であると思う。</p> <p>・学ぶことの喜びを体験して欲しい。それには、自分は「何が分からないのか。」「どこが苦手なのか。」を積極的にとらえていくところから始めて欲しい。</p> <p>・個別目標1・2の取り組みを通じ、自分だけを見るのではなく、社会や他者に興味を持つこと、相手を尊重することを学んできたからこそ、こどもたちの効果測定で、社会・算数の正答率が、3学年とも向上した一因ではないかと考える。年間を通じて得られた大きな成果の証だと思う。</p> <p>・こどもたちが、楽しく学び続けられる環境作りの取組を評価する。</p>

学 個 校 別 力 目 標 ・ 教 師 力 を 向 上 さ せ ま す	校内研究等のOJTの充実を通して、教師の授業力を向上させます。また、質の高い教育を実現するため、学校の組織的な運営力を向上します。あわせて、教師がやりがいをもって働くことができる魅力的な環境づくりを進めます。	①児童・生徒一人ひとりの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の視点による授業改善を行っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	B	・校内研究やOJT研修を行い、ユニバーサルデザインを活用した指導力の向上を図り、児童に寄り添う教育活動を推進していく。また、チーム学校として組織的に取り組むことで、教師がゆとりをもって校務に取り組めるようにする。	4:	【取組】 ・ICTを活用し、具体物を示したり、算数科では、立体や作図などの指導で視覚的に分かりやすく活用したりして、理解力が高まる指導方法を行うことができた。 ・校内研究授業では国語で読解力を身に付け、考えを深めるこどもの育成」をテーマに研究を行った。朝の読書の時間も実施し(教員や保護者による読み聞かせ)、国語力の向上へと繋げることができている。 ・学年だよりを廃止し学校便りだけにすることで業務改善につながった。 ・教科担任制(5・6年生の理科と社会)を行うことで、教材研究の削減や専門性の向上につながった。 ・6年生での副担任性を取り入れたことで、より細かな生活指導が行えた。 ・昨年度より5回多く、各教諭の専門性を生かしたOJT研修を行うことができた。全教職員が日頃より体験的活動の学習を意図的に計画し、考え、発信する力を育成することができた。	A	7	・学校力や教師力の向上のためにはOJTによる、先輩教師より後輩教師へ経験を通して教育スキルを伝えていくのが最も有効だと思う。人を育てることは本当に大切なことだと思う。 ・ウェルビーイング教育を通して、こどもたちが精神的に落ち着いて、幸せを感じるような学校生活を過ごせるように願っている。 ・読解力を更に向上させてほしい。	
		②教職員がそれぞれの専門性を生かしたり、地域の特徴を生かしたりして教育活動を行っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	A		3:		・児童の多様性への対応など教師に求められることも複雑化してきていると思う。教師同士の情報交換や共有を活発にして、教師が児童に正しく向き合える時間・機会が増えることを期待している。 ・若い先生方が一生懸命取り組んでいる姿、風通しの良い風土が感じられた。様々な取り組みが無理なく、継承されることを願っている。 ・多様化するこどもたち個々への対応が一段と難しくなってきた。学校が試行錯誤しながら、様々な改善策を取り組んできたことは、いずれ成果となる。引き続き取組を継続して欲しい。			
		③教職員の業務適正化等に取り組み、児童・生徒に教員が向き合う時間を確保する等、ウェルビーイングを高める取組を行っている。	4:「おおむね高まっている」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむね高まっている」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむね高まっている」と回答した。 1:「おおむね高まっている」と回答した教員が60%未満であった。	B		2:		・教師間で相互授業を共有できることは、お互いの信頼関係がなければ成り立たない。今後も継続して頂き、先生方のチームワークがより一層、進化向上していくことを期待している。			
						1:		・今年度はOJT研修を主任教諭が主となり行った。主任以外の若手教諭だけで企画したOJT研修会を行い、様々な立場で児童に寄り添う教育活動になるように研修を深める。 ・ICTを活用し考えやアイデアを端末で共有したり、グループでの共同作業に活用したりする。ペア活動の前に個別学習時間を設け、一人ひとりの可能性を引き出す時間の確保を行う。 ・児童理解が客観的にでき、指導方法にブレがなくなる効果的な結一ENを有効に活用するために、結一ENの研修や情報共有時間を計画的に確保する。 ・職員の時間外労働時間を本年度より各自が減らすように努める。会議の精選や余剰時数を減らし、教材研究の時間を確保する。	C	0	
た 自 個 め 分 別 の ら 目 学 し 標 び く 5 を い 支 き 援 し き ま と 生 き る	困難のある児童・生徒一人ひとりの状況にあわせて教育環境を整えらるとともに、相談機能の充実を図ることで、すべての児童・生徒が自分らしくいきいきと生きるための学びを支援します。	①インクルーシブ教育システムの構築に向けて、教員の資質・能力の向上や校内における支援体制の充実、特別支援教室巡回指導教員との連携等を行っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	A	・児童一人ひとりに向き合い、校内体制や教育環境を整えることで、児童の可能性を伸ばす指導に心がける。また、学校いじめ防止基本方針に沿って早期発見・早期対応に努め、スクールカウンセラーや外部機関と連携しながら児童に寄り添った支援を行っている。	4:	【取組】 ・特別支援教室巡回指導教員との情報交換を毎週金曜日に行い、児童理解に努めた。 ・道徳授業地区公開講座では、スクールカウンセラーによる講演会を行った。110名以上の保護者が子育てについての講演会に参加した。 ・学校いじめ防止基本方針に沿って、いじめや命に関する授業を行い、「いじめ撲滅宣言」を各学級で作成して児童集会で発表した。 ・生活指導夕会(毎週金曜日実施)では、いじめ問題や問題行動、不登校児童について情報共有を行った。必要に応じて、校内委員会(ケース会議)を実施した。 ・ひまわりルームでの活動を通して、不登校が改善された児童もいる。(毎日2〜3名利用) ・カウンセラーによる児童理解の研修を生活指導夕会を活用して行っている。	A	9	・インクルーシブ教育システムによって、誰でも取り残されることなく、学校教育を受けられることは教師の努力やスクールカウンセラー等、外部機関のサポートによるものと理解している。特に人権擁護と考えられる「いじめ」根絶の努力は評価できる。 ・「いじめ撲滅宣言」の取り組みは引き続き続けて欲しい。 ・学校はある意味では社会の縮図と考える。サポートルーム・スクールカウンセラー・ひまわりルームなど、いろいろな大人が居て、児童の困りごとや悩みを聞いてくれる大人が居ることは心強いと思う。今後、成長していき社会に出ていく際の勇気につながると思う。	
		②学校いじめ防止基本方針に沿って、いじめの未然防止、早期発見、早期対応等のための組織的な対応を実施している。	4:「組織的な対応ができた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満の教員が回答した。 2:60%以上80%未満の教員が回答した。 1:「組織的な対応ができた」と回答した教員が60%未満であった。	A		3:		・ひまわりルームでの活動を通して、不登校が改善された児童もいる。(毎日2〜3名利用) ・カウンセラーによる児童理解の研修を生活指導夕会を活用して行っている。	B	1	・ひまわりルームでの活動は保護者に安心を与えるため、不可欠であると感じられた。 ・ユニバーサルデザインで開かれた入二小を目指し、こども一人ひとりに向き合い、適格なサポートを施せる体制作りにも努める取組を評価する。 ・いじめ・問題行動・不登校などの原因は、「孤立」にあると考える。一人ぼっちにしない、させない、環境づくりを引き続きお願いしたい。
		③スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとの連携等、児童・生徒・保護者が相談しやすい環境を整備し、一人ひとりの能力や可能性を最大限に伸ばすことを意図した指導や支援を行っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。 2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。 1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。	A		2:		【改善策】 ・サポートルームと連携して、全教職員でこどもたちを見守る。問題行動については、必要に応じて校内委員会を設け、次年度も情報共有を図る。 ・不登校児童については、教員だけでなく、SC、SSWなど様々な外部関係機関と連携を継続して対応していく。 ・教室に居られない児童については、保護者と連携を取りながら、引き続きひまわりルームの活用等を行い、不登校児童への様々なアプローチを図り、居場所づくりに努める。	C	0	・教室に居られない児童の居場所として、ひまわりルームを活用し、不登校の改善がされた児童がいることは、素晴らしい成果である。
						1:			D	0	

安柔個 心軟別 なで目 教創標 育造6 環的境 なを学 習空 間と安 全・	学校施設について、ICT環境等の教育環境の整備を推進するとともに、児童・生徒の安全・安心を向上させるための教育を推進します。	①学校や地域の伝統・特色や、安心・安全な学校生活づくりを踏まえて、学習環境を整備している。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	A	・コミュニティ・スクールとして地域学校協働本部「チーム入二」を活用したり、地域の特色を生かした学習内容を計画したりして教育環境を整える。	4:	【取組】 ・チーム入二(地域学校運営協働本部)会議を定期的に設け、チーム入二と教職員の連携が図れるようになった。 ・保護者配信メール・TETORUでの情報やHPの定期的な更新を行った。 ・学校運営協議会を年間を通して開催し、学校の状況や児童の様子を報告するとともに助言をいただき、日々の教育活動に生かすことができている。	A	9	・「チーム入二」の活動も年々活性化しており、保護者や近隣住民の学校教育参加を実感できる。 ・数年にわたる校舎改築工事により、校舎・校庭・プールなど不便なところが多いところ、上手に種々工夫して児童に不便がないようにしているのは頭が下がる。 ・チーム入二の取り組みは非常に頑張っていると思う。 ・TETORUの活用で、今後良い一層、地域との連携を深めていくことを期待している。 ・学校運営協議会を通して、取り組みが分かりやすかった。									
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。			3:					【改善策】 ・チーム入二(地域学校協働本部)を活用して、更に各学年が様々な授業や行事で保護者を活用し協働し続けるように改善を図る。 ・避難訓練は、改築のスケジュールも考慮しながら、年間指導計画を策定していく。防災教育については、各教科と関連しながら学習していく。	B	1	・TETORUの活用、チーム入二との連携を通じて、保護者との情報共有と活用拡大を図ることに期待する。 ・避難訓練、防災教育について地域(防災拠点会議)と連携した体制作りを望む。 ・チーム入二を活用して、保護者に協働しているような体制が整ってきつつあり、今後も教職員とチーム入二が連携を取りながら皆で安心な教育環境作りができると良い。					
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。			2:									・デジタルドリルやデジタルテストの活用の幅を広げる。	C	0		
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。			1:												D	0
学地学個 校域校別 をコ・目 つミ家標 くユ庭フ リニ・ ますイ域 の核と携 して協働 による	地域コミュニティの核としての学校づくりや地域の特色を生かした学校づくりを進めるとともに、学校・家庭・地域が連携・協働して、地域社会全体で子どもたちを育成します。	①「地域コミュニティの核としての学校づくり」を目指して地域と学校が連携・協働した様々な活動を実施している。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	A	・学校、家庭、地域が連携・協働して、学校行事やPTA活動を行う。 ・地域学校協働本部「チーム入二」を活性化させ活用することで、地域社会全体で子どもたちを育成する。	4:	【取組】 ・学校ボランティアの配信をチーム入二(地域学校協働本部)に託すことで、職員の業務軽減となっている。保護者も授業への協力体制の意識が高まってきた。 ・朝の通学路への立ち入り禁止の看板出しや、夕方のパトロールを保護者の方が計画的に実施し、防犯への啓発活動を行っている。 ・自転車教室や朝の読み聞かせを保護者の方が行い、学校と連携し協働的に活動ができている。	A	10	・学校・家庭・地域の連携・協働による地域コミュニティの核としての学校は機能していると思うが、少数とは思いますが、教育に対する家庭での保護者の理解や努力が少し不足している感がある。また、地域住民の高齢化なども考えられるが、学校に対する協力体制の強化を望みたい。 ・学校ボランティアの募集は引き続き根気強く頑張してほしい。 ・今後、より地域との連携を深め、学校内のみならず、地域においても安全で楽しく児童が過ごせることを期待している。									
			3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。			3:					【改善】 ・チーム入二(地域学校協働本部)への業務が過多にならないように、計画的に保護者へ募集ができるようにする。 ・学校行事については、保護者の関心も考えながら、今後も企画・実施をしていく。	B	0	・地域とのさらなる連携、協働を深める学校づくりの取組を評価、期待している。 ・学校を核に、地域全体で、子どもたちを育成することが、地域の活性化につながることは、何より明らかである。そして地域が活性化することは、健全な子どもの育成につながり、そこに相互のループが形成される。継続的な地域コミュニティ作り、共に連携できることを望む。					
			2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。			2:									C	0			
			1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。			1:											D	0	
③家庭教育に関する情報の発信やPTAなどと連携した講演会・学習会、またはその双方を実施している。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。	A																	
	3:80%以上100%未満が「おおむねできた」と回答した。																		
	2:60%以上80%未満が「おおむねできた」と回答した。																		
	1:「おおむねできた」と回答した教員が60%未満であった。																		

○「成果評価」は、各校が4段階で定めた成果指標によって行う。

○記入にあたっては、各学校で取り組んでいる自己評価項目に照らし、該当する項目を取りまとめて行う。

○学校関係者評価の「評価」は、A:自己評価は適切である B:自己評価はおおむね適切である C:自己評価は適切ではない D:評価は不可能である の4点について、評価した人数を記載する。